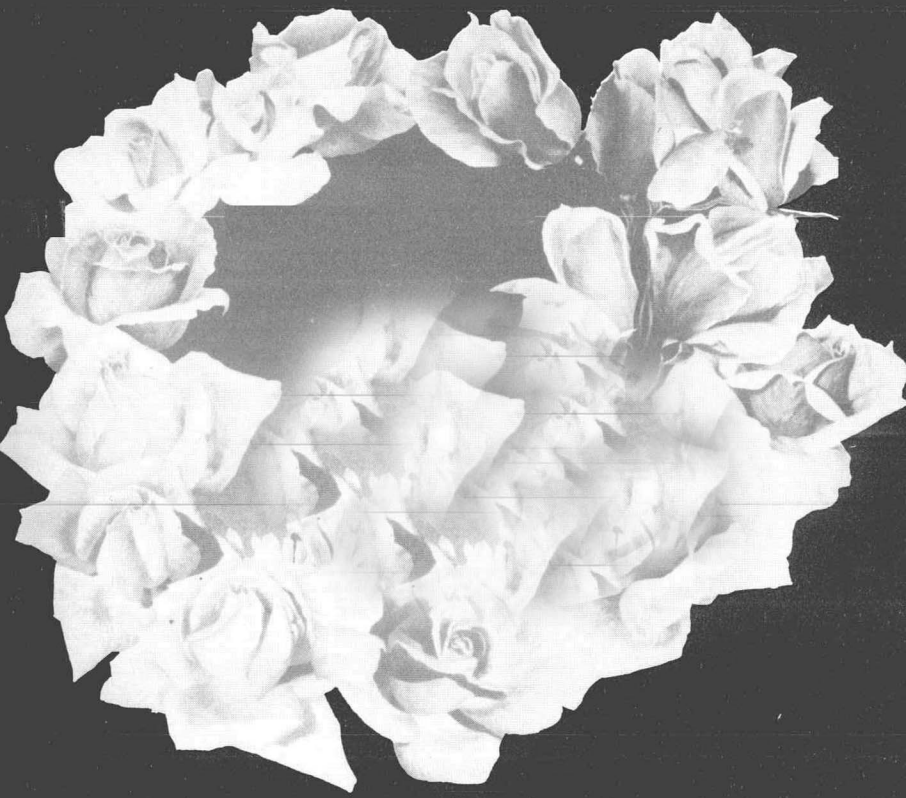
炎の陰画

半村良

の陰画

半村 良



河出書房新社

炎の陰画

昭和四十九年八月五日　初版印刷
昭和四十九年八月十日　初版発行

著者　半村　良
発行者　中島隆之
発行所　株式会社　河出書房新社・東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話東京(〇三)二九二一—三七一一・振替東京一〇八〇二
印刷所　株式会社文弘社
製本所　加藤製本株式会社

©1974

定価はカバー・帯にあります

目次

白鳥の湖……5
森の妹……27
箪笥……101
ちゃあちゃんの木……111
炎の陰画……153
逃げる……211
散歩道の記憶……241
あとがきにかえて……261

装幀　野田弘志

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

炎の陰画

白鳥の湖

いまは夏。

太陽がギラギラとかがやいて、海べからは若者たちのはなやかな笑い声がきこえてきます。遠くにまっ白な雲がもりあがり、よしずばりの小屋にかけられた、青地に白の「氷」という小旗が、ねむくなるような午後の風に、ゆらり、ひらり、と揺れています。

こんなとき、寒い冬の日のことを思い出すなんて、少しおかしいでしょうか。……でも、ちょっと思い出してみてください。

白鳥のことです。あのまっ白な冬の鳥のことです。まい年秋のおわり、冬のはじめに寒い北の国から、その年生まれた若鳥たちをつれて飛んでくるあの白鳥たちは、この夏の日、どこでどうしてすごしているのでしょう。

白鳥のおはなしは、ずいぶんたくさんあります。読んで聞かせてもらったおはなしもありますし、自分で読んだものもあります。

どのおはなしでも、まっ白で美しい姿の白鳥は、やさしくて、どこかたよりなげで、だからこそいっそう心に焼きついて残っています。

でも、その白鳥たちの夏の日の姿は、どのおはなしにも書かれていなかったような気がします。白鳥は私たちにとって、やはり冬の鳥なのでしょうか。

昭和二十三年の冬。

戦争に敗け、道も家も人の心もめちゃめちゃになってしまっていた、寒い寒い冬のことです。

食べるものもなく、みんな痩せて、ギスギスした自分の心を悲しく思いながら、明日はどうなるかわからないまま歩きまわっていました。

そんなとき、夜道にポッとあかりがついたように、人の心をなごませるニュースが、東京のある新聞にのりました。

アメリカの田舎町に住むひとりの少年が、自分で育て、可愛がっていた三羽の白鳥を、日本へプレゼントしようと決心したのです。

無邪気なその善意は、なによりもまず、ついこのあいだまで日本人と殺し合い、傷つけあっていたアメリカの軍人たちの心をうちました。やかましい規則はどこかへほうり出され、いかにもアメリカ人らしいやりかたで、たった三羽の白鳥のために特別機が仕立てられ、日本へ着くと軍楽隊が勢ぞろいしてそれを迎えました。

焼け残った一張羅の背広を着こんだ日本のお役人が何度も何度も握手してそれをうけとり、三羽の白鳥は皇居のお堀に放されたのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

仕事もなく、食べるものもとぼしく、生きる目あてさえ失いかけたたくさんの人々が、お堀に浮ぶ白鳥を見に集って来ました。まっ白な美しい鳥の姿を見て、人々は自分たちが平和な社会へむかっているのだということを、しみじみと味わったのです。

中には、子供たちに食べさせなければならない、大切な大切なパンのはじを、ほんの少しちぎって、白鳥に投げあたえる人さえいたのです。その時代にあって、それはなんとぜいたくな行為だったことでしょう。でも、たったひとかけらのパンを投げることで、その人の心はこの上もなくゆたかになったはずでした。

お堀の白鳥は人々の心にともったあたたかい光でした。日本中の人が、その白鳥を思い浮べるたび、冷えた心に血が戻ってくるのを感じたのです。

でも、あいかわらず街は浮浪者でいっぱいでした。泥棒や人殺しが闇市の人ごみにまぎれてうろついていました。黒人兵の腕にぶらさがった派手なみなりの女たちは、まるで自分たちが勝ったような顔で、よれよれの軍服を着た男たちを眺めていました。

何もかもがまだ混乱のさいちゅうで、本当のことを言えば、警察だってどうしていいかわからなかったんです。法律どおり闇市を取締ったって、それは形ばかりのことで、闇市がなくなれば警官たちだって食べて行けなくなるのですからね。

でも、泥棒や人殺しや暴力ざたとなるとはなしは別です。警官たちはなんとかして、このめちゃくちゃな社会に、少しでも秩序をとり戻そうと努力していたのです。ことに、白鳥が泳いでいるお

堀に近い、桜田門の警視庁は、毎日毎日とてもいそがしそうでした。
人殺しもたくさん起りましたが、それにもまして暴力団がのさばっていたからです。闇市が栄えると、そこを縄張りにする暴力団が力をつけ、やがて暴力団同士の喧嘩になるのです。
おまけに、この時代は第三国人と呼ばれる人々が、今では想像もつかないくらい、無法なことをやっていたのです。そして、いちばん大がかりな暴力ざたは、いつもきまってその第三国人のグループと、日本の暴力団との間で起ったのです。
警視庁のそういう暴力団の事件をあつかう係りの刑事に、石原忠男という男がいました。としは二十三歳で、戦後のどさくさでもなかったら、まだ街角の交番で先輩にいろいろ教わりながら勤務しているくらいの若さでした。
ある日、石原刑事は新橋のほうの暴力団の情報を集めにでかけ、夜遅くなってから警視庁へ戻りました。進駐軍の兵隊でにぎわう第一ホテルの横丁を抜け、暗い日比谷公園を横切って、いつものように近道をとりました。
おなかがとてもすいていました。おひるすぎ、すいとんをたべただけなのです。はいている靴は右と左が別々の靴を寄せ集めて一足にしたもので、この寒いのにコートもありませんでした。冷たい風がひゅうひゅうと渦をまいて通りすぎ、街灯もない日比谷公園の中は、そこかしこにまっくらな闇がうずくまっていました。
空には意地悪いほど冷たく澄んだ月があって、その光が石原刑事の進む道を青白く照らしていま

した。
そのとき、どこからかプーンと香ばしい肉の匂いがして来て、石原刑事は思わずゴクリと生つばをのみこみました。
世の中には運のいい奴もいるものだ……石原刑事はとっさにそう思いました。じゃがいも一個、あめ玉ひと粒が手に入らなくてあくせくしている自分にひきくらべ、たとえ浮浪者だろうと乞食だろうと、ほんものの肉をたべられる人間がいるなんて、うらやましいかぎりだったのです。
ああ、肉がたべたい。ステーキ、串焼き、とんかつ、唐揚げ……なんでもいいから、ほんのひと口でもいいから肉がたべたい。
石原刑事は寒い夜道をトボトボと歩きながら、うつむきかげんにそんなことを考えていました。
こんなところで肉を焼く匂いをさせるのですから、いずれ宿なしのルンペンにはちがいありませんが、できれば警官という身分をかくしてでも、その仲間にいれてもらいたい思いでいっぱいだったのです。
と、突然左手の闇の中から、地面にひきずる程すその長いオーバーを着た戦闘帽の男が、ふらりと月の光の中へあらわれました。匂いのもとはその男だったのです。男はむしゃむしゃと大きな肉の塊りにかぶりつきながら、石原刑事とすれ違いました。
我慢するのがとても大変でした。あたりに人目はないのです。その肉を持った男に襲いかかり、ぶちのめして奪いたい衝動にかられたのです。

でも、やはり警察官でした。石原刑事はともすればあともどりをしそうになる自分の脚をひきずるようにして、ゆっくりゆっくりとその場を遠ざかりました。

ところが、あくる朝の新聞を見た石原刑事は、それがお堀の白鳥の肉だったことを知らされたのです。

ゆうべ肉を持った男とすれ違った、丁度そのあたりの木かげに、白い羽根がむざんに散らばっていて、小さな焚火の跡がのこっていたのだそうです。

東京中が、いや日本中が、言いようのない怒りと悲しみに口もきけないような雰囲気につつまれたのです。アメリカの少年に何と言って詫びたらいいのでしょう。特別仕立の飛行機で送ってくれたアメリカの軍人たちにだって、会わせる顔がありません。

「だから敗けちゃったんだよ」

石原刑事といつも一緒に行動する、津山という先輩の刑事が吐きすてるようにそう言いました。ひもじくても、たとえ餓え死んでも、その白鳥だけは、絶対に日本人がたべてはいけなかったのです。それは人の心なのです。どんなおろか者だろうと、気ちがいだろうと、日本人であるかぎりお堀の白鳥だけは大切にするはずだ……みんながそう信じ、なんの疑いもなくそのことを最後の誇りに感じ、これからさきのけわしい道のりを、その誇りにかけてのり切って行くつもりだったのが、まんまと裏切られてしまったのです。

お堀にはまだ二羽の白鳥が残っていましたが、それはもう何のささえにもならない、ただの白鳥

で、むしろ人々の重荷にさえなってしまったようでした。
悲しいことに、人間の心にかかわるいくら大きな事件でも、結局一羽の鳥が殺されたというだけのことになってしまうのです。
石原刑事は犯人の顔を知っているただ一人の警官として、ぜがひでもとっつかまえてやりたかったのですが、つかまえたところで大した罪にはなりっこありません。口惜しがるだけで、結局はあいかわらず空きっ腹をかかえ、暴力団同士のいざこざに追いまくられる日が続きました。
やがて春が来ました。去年のおわりからくすぶっている新橋の闇市のもめごとが、いよいよ最後のどんづまりへ来て、今日あすにも日本の暴力団と第三国人グループの間で血の雨が降りそうな気配になっていました。噂によると、新橋の古ビルのどこかに、戦争中軍が戦闘機に積んでいたという凄い威力の機関銃がかくされていて、いざという時はそれに物を言わせる気だそうです。自然警察側も必死で、石原刑事の仲間たちは、まるで自分が喧嘩をするような具合に殺気だっていました。
石原刑事と津山刑事が緊張した空気のみなぎる新橋の町をパトロールしている時でした。突然前方の横丁から一人の男が走り出して来て、うしろめがけて盲滅法ズドンと一発拳銃を発射しました。ちょっと間を置いてから、その男のあとを四、五人のやくざ風の男たちが追いはじめます。
津山刑事は若い石原刑事をちらっと見て、「それっ」
と声をかけました。ふたりの刑事は早手まわしに店を閉め、戸をたてて流れ弾を警戒する商店街を、バタバタとかけ出しました。

細い道が交差していて、いっぽうは都電どおりへ、いっぽうは国電のガードをくぐって闇市のほうへ抜けています。ふたりの刑事はその角で一瞬たちどまり、あたりを見まわしました。男たちが向った方角をたしかめようとしたのです。

石原刑事は道の向う側にいる男に訊ねようと思ってその顔をみつめました。男は黙って闇市のほうを指さし、津山刑事はそれを見るとすぐ走り出しました。

でも、石原刑事はしびれたように突っ立ったままでした。その男は、冬の日比谷公園で白鳥の肉を食べていた、あの長いオーバーの男に間違いなかったのです。

突然石原刑事の心に、ふきあげるような悲しみが湧き出して来ました。人間の心を食べてしまった人間がそこにいるのです。そんなとき、人間は怒りよりもまず悲しみを感じるもののようです。そして、悲しみが怒りに変わるころ、相手もやっと石原刑事の顔を思い出したようでした。

「あ……」

と痩せた顔をみにくく歪ませると、とたんに身をひるがえして都電どおりへ逃げ出しました。石原刑事の頭の中で白鳥が一羽飛びたち、バサッバサッという羽音をたててそのほうへむかいます。

気がつくと、石原刑事は夢中でその男のあとを追っていました。はるかうしろのほうで、ダダダダ……という機関銃の音がはじまっていました。

津山刑事はその時殉職しました。撃ち合いをとめようと、双方のまん中に割って入り、どちらの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.